

# —ハルシナイから上流へ③—

前回、松浦武四郎著『石狩日誌』の丸木舟の絵が、昭和三十四年発行の『旭川市史第一巻』の表紙の裏に、カラーで掲載されていることを紹介した。この丸木舟の絵が、旭川市の中学校の教科書参考ワーク『社会の自主学习』（新学社発行）「旭川地区版」に掲載されている。

その上、同書には、前回から紹介している高畑利宜の写真と、明治五年に高畑が上川を三カ月余にわたり調査する、開拓使による「上川郡出張命令書」（滝川市郷土館蔵）も掲載している。また、その本文では、「開拓使判官の岩村通俊は、高畑利宜に上川の調査を命じた。彼は一八七二（明治五年）四月三十日（註・細大日誌）による。旧曆に札幌を出発し、三か月余りにわたり、上川地域のアイヌの人たちの生活や地形や風土・産物などの調査を行うとともに、農業の試作を行い、豊かな土壌を持つ上川の状態を報告し

た。」と、簡潔に記述している。しかも、【資料ワーク】として、「次の問いに答えなさい」問①、高畑利宜が上川調査をした年を西暦で答えなさい。問②、高畑利宜は、上川でどのようなことを調査したか、書きなさい。」と、高度な

②層雲峡付近



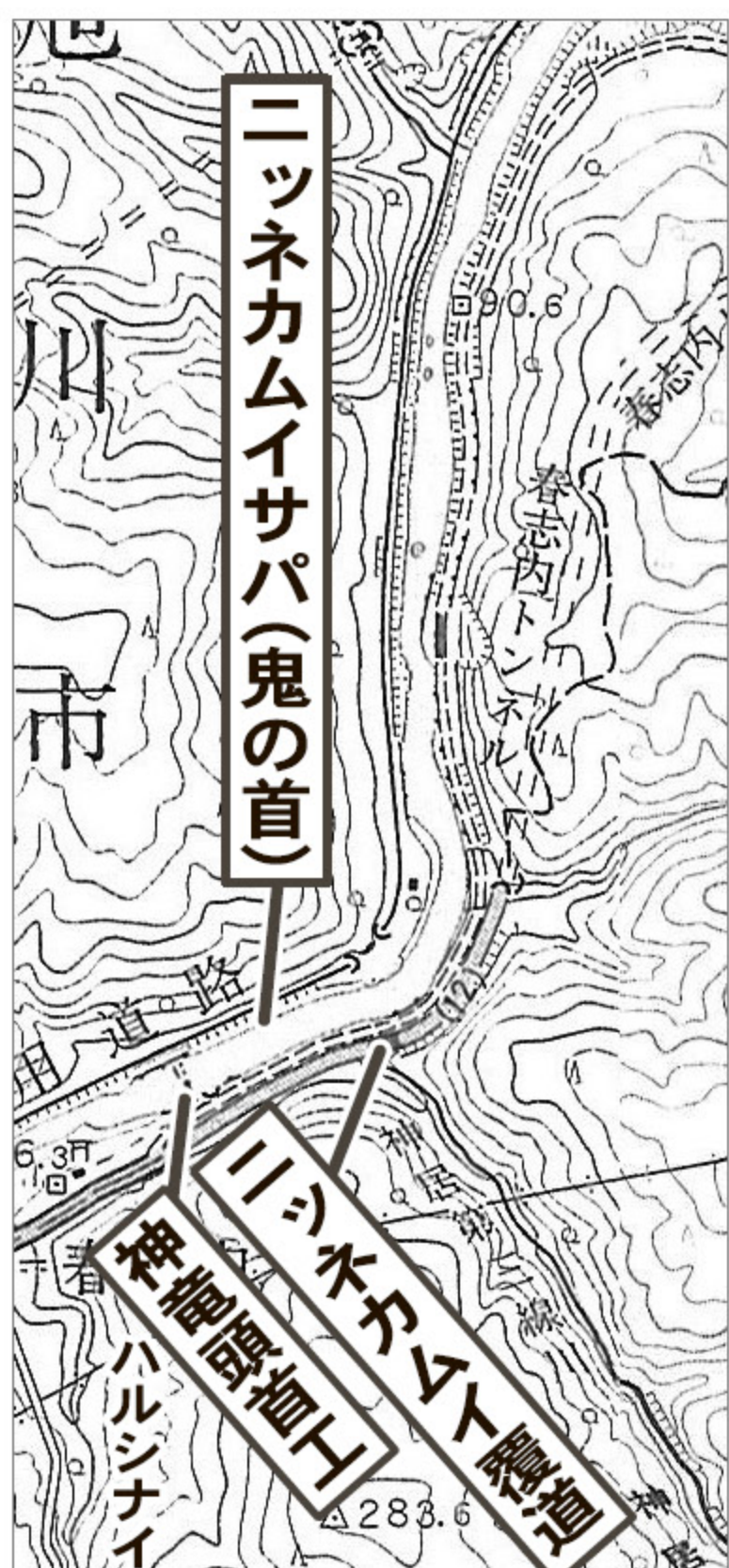
①カモイコタン



## 断章 旭川のアイヌ語地名研究

78

高橋 基



質問もある。全八十五ページの内、旭川地区版には、巻末ではあるが、近藤重蔵から旭川駅新駅舎オープンまで、五ページを充てていて、内容も充実しているのには驚かされた。

さて、先々週の六月二十一日(土)、富岡製糸場が世界文化遺産に登録された。明治五年に群馬県富岡に設立された官営の機械製糸工場である。同年の五月十五日に、北海道では高畑利宜が、丸木舟で札幌を出発し、十日目で神威古丹に着き、大淵(パラモイ)から荷物ハルシナイに陸送し、大型の丸木舟二隻は空舟にして、ハルシナイまで引き上げたので、この作業のために、ハルシナイで二日間露宿した。前回は高畑利宜の「出張復命書」でカモイコタンの部分を紹介した。

高畑利宜は、後年、回顧録(『旭川市史』では、「高畑利宜伝抄」)で、「丸木舟八楫取アイヌ一名ヲ乗セ、綱ヲ以テ牽キ上げ、ハルシナイニテ二日間滞在調査、六月廿七日春志内乗船、神居村ナル現今忠別太二到着セリ」と、カモイコタンでの空舟の引き上げ方を明らかにしている。現在の状況から想像し

ても、大変な作業であったと推測できる。

高畑利宜は、七月一日から戸籍調べをしている。明治五年の上川は、和人は勿論一人もいず、アイヌ戸数六十八戸、総人員三百六人、内男百七十七名、女百三十六名と復命する。以下、紙幅の関係で、石狩川水源調査についてのみ述べる。

高畑利宜は、七月二十日から、往復十八日間をかけて石狩川水源を調査する。掲載絵地図は、高畑利宜の自筆で、「石狩川ヨリ水源二到ル見取図」(滝川市郷土館蔵)の部分図。①のカモイコタンでは、蟬石に注目している。②の現・層雲峡付近では、「温泉」があるが、これは、既に安政四年(一八五七年)に松田市太郎が発見し、松浦武四郎も地図に記載している。

初の記録の「大滝(現・流星・銀河の滝)は、「夫婦滝ト命名。天下無双ナリ」としており、また、現在の「大函」は、「函川と命名ス」と記し、出張復命書では、「右二ヶ所ハ他国ニ類似ナキ珍無類の名所ト存ス」と絶賛した。世界文化遺産となった富岡製糸場が設立された、同じ明治五年に、高畑利宜が、層雲峡の名勝を発見したのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します